

---

# 蠢くもの

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蠢くもの

### 【Nコード】

N6023Q

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

プロレスラーのジャイアント坂本はテレビ番組の取材で南アフリカに行った。そこで魚を食べたのだが。魚の虫にはくれぐれもご注意を。

## 第一章

蠢くもの

プロレスラーのジャイアント坂本はそのリングネーム通り大きい。二メートルはある。

筋骨隆々とした身体であり恵まれた体格で圧倒的な強さを見せている。

その彼だが巨体を維持する為にかなり食べている。

「いつも凄いですね」

「まだ食べられます?」

「ああ、勿論だ」

今日はちゃんこを食べていた。食べながら後輩達お言葉にこたえていた。

「まだまだだな」

「成程、それじゃあ」

「どうぞ」

「ああ。しかしこのちゃんこ」

そのちゃんこを食べながらの言葉であった。

「あれだな」

「あれ?」

「あれっていいいますと?」

「魚が美味しいな」

笑顔での言葉だった。

「それもかなりな」

「ああ、そうですね」

「タラモシヤケも」

「いい味出してますよね」

「そうだな。それに」

それを食べながらだ。彼はまた言った。

「野菜も色々が入ってるしな」

「野菜もたっぷりと食べないといけないですし」

「何でもたっぷりとですね」

「ああ、食べ物身体にいいものをたっぷりとだ」

巨大な丼の中に並々と入れられたそのちゃんこをどんどん食べながら言う。

「食べないとな」

「それで何杯目ですか？」

「そういえば」

「十杯目か」

少し考えたうえで後輩達に答える。今はテーブルの上に置かれた巨大な鍋を囲んでいる。その鍋にこれでもかと魚や野菜が入れられているのだ。

「それだけは食べてるな」

「けれどまだですね」

「まだいけますよね」

「勿論だ。それはそうとな」

坂本はその十杯目を食べながらまた言う。

「テレビの旅番組の話だけれどな」

「それですけれど」

眼鏡をかけた小柄な男が彼に言ってきた。マネージャーである。

岩の如き顔の坂本とは正反対に優しい顔立ちをしている。まさに好対称である。

「場所は南アフリカになりました」

「南アフリカか」

「はい、シーラカンスを探す旅ということだ」

「シーラカンスか」

「それでいいですよね」

「面白そうだな」

坂本のそのいかつい顔が笑顔になっていた。

「シーラカンスか」

「はい、坂本さんもそれでいいですよね」

「ああ、是非やらせてもらうな」

笑顔で答える彼だった。

「シーラカンスを釣って食うんだな」

「あつ、それはなしです」

マネージャーはそれは否定した。

「貴重な魚ですから。発見するだけです」

「それは駄目か」

「はい、駄目です」

真面目な声で言うのだった。

「そういうことで」

「わかった。それじゃあそういうことだな」

「食べるものは別にありますし」

こんな話もしたのだった。そうしてその南アフリカにテレビ番組の収録で向かった。そのシーラカンス自体はすぐに見つかったのだった。

「ああ、これが」

「はい、これです」

坂本とマネージャーはこの時船で海の上にいた。そこで水槽の中にある一匹の手足の様な鱗を持つ大きな魚を見ていた。それこそがだ。

「シーラカンスです」

「面白い形をしてるんだな」

「生きた化石ですよ」

マネージャーはまた話した。

## 第二章

「本当に」

「貴重な生き物なんだな」

「そうですよ。もう生きていること自体が奇跡ですから」

マネージャーはまた話した。

「まあ番組の目的はこれで果たされました」

「そっだよな。じゃあ後は」

「食べましょう」

マネージャーは笑顔で坂本に話した。

「南アフリカの料理を」

「どんな料理なんだ？南アフリカの料理って」

「実はここにも日本人がいますよ」

「南アフリカにもかい」

「はい、いますよ」

こう坂本に話す。

「ちゃんと」

「そうか、俺達って色々な場所にいるんだな」

「そこでお刺身を食べるんですよ」

「南アフリカの和食か」

「どうですか？それで」

こう彼に話す。

「南アフリカの和食で」

「それも面白そうだな。じゃあそれにするか」

「はい、それじゃあ」

その食べるものも決まった。これも番組に収録されていることである。店も和風のものだった。欧風の街の中にそれはかなり目立つものだった。

寿司屋を思わせるその店の中で。坂本とマネージャーは番組の

スタッフと共にあるものを食べていた。それが何かというのだ。

「こっちの川魚の刺身です」

「川魚？」

川魚と聞いてだ、坂本の顔が少し曇った。なぜかというのだ。

「ちよつとやばくないか？」

「虫ですか」

「それが怖いだろ」

彼が言うのはこのことだった。寄生虫のことなのだ。

「川魚はな」

「ああ、大丈夫ですよ」

「それはね」

だがここでだ。スタッフ達がにこやかに笑って彼に言った。

「このお店はそういうことはしっかりしてますから」

「わかってますから」

「そうなんだ」

坂本はそれを聞いて笑顔になった。

「そんなにしっかりしているんだ」

「ちゃんと養殖の衛生的にしっかりしたお店から仕入れてますから」

「大丈夫ですよ」

「よし、それじゃあ」

こう話してだった。その刺身や様々な和食を食べていく。

収録は無事終わった。坂本にとっては満足いく結果に終わった。

しかしである。それから暫く経ってだ。彼の右肩にあるものが出て来た。

それは瘤だった。五センチ四方の瘤がだ。彼の右肩に出て来たのである。

皆はそれを見てだ。怪訝な顔で彼に問うた。

「何処かにぶつけました？」

「それ何なんですか？」

「俺も気になってるんだけれどな」

当人も首を捻って言う。

「何時の間にかできてたんだよ」

「何時の間にか、ですか」

「そうなんですか」

「ああ、何だろうな」

また首を捻る。

「この瘤な」

「あまり気になるんだっいたら取りますか？」

「どうしますか？」

「別に痛くもないし別にいいだろ」

彼はそれはいいとした。

「特にな。それじゃあな」

「はい、それじゃあ」

「放っておきますか」

この時はそのままにした。それで終わりだった。

しかしである。数日後瘤は右肩から消えていた。だがここで。

「あれ、手の甲にですか？」

「瘤が移ってますよ」

「ああ、何でなんだ？」

彼自身わからないことだった。

### 第三章

「瘤って移るものか？」

「そんな話聞いたことないですけどけれど」

「なあ」

「瘤が移るなんてな」

「これで顔が浮き出るんだつたら考えるがな」

坂本はここで冗談を言った。人面瘦である。

「それもないしな」

「それじゃあ完全にホラーじゃないですか」

「楳図かずお先生ですよ」

伝説的な怪奇漫画家である。その漫画の怖さは読んだ子供のトラウマになる程である。そうした意味ではつのだじろうと双壁を為す。

その漫画家の話を冗談で出しながらジムの中で練習をする。坂本はその中でまた言う。

「やっぱりな」

「痛みはないですよね」

「別に」

「ああ、何も無い」

それは彼も言うのだった。

「別にな。けれど何なんだろうな」

「おかしいな瘤ですよね」

「全く」

「ああ、何だろうな」

まだ首を傾げるばかりであった。それから数日後だ。今度はだ。背中にあつた。皆それを見てまた言う。

「今度は背中って」

「よくもまあそんなに動き回るものですね」

「何ですかね、これって」

「変な瘤ですね」

「ああ、何なんだろうな」

坂本もいよいよ不思議に思っただった。

「ここまであちこち移動するなんてな」

「瘤なんて動かないですから」

「そんなの全然」

「それがどうして」

「本当に切り取るか？」

彼も遂にこの考えに至ったのだった。

「やっぱりな」

「ええ、考えましょう」

「あまりおかしいと」

後輩達もスタッフ達もいよいよ奇怪に感じた。そしてまた数日後であつた。

今度は額であつた。そこに出来ていたのだ。

皆それを見てだ。いよいよ言う。

「やっぱりこれは」

「切り取りましょう」

「おかしいですよ」

「こんなに瘤が動き回るなんてないですよ」

「絶対に」

「そうだな」

坂本ももう冗談を言わなかつた。言える筈もなかつた。

そしてだ。真剣な顔で一同に対して言う。

「手術受けるか」

「ええ、じゃあすぐに」

「そうしましょう」

こうしてだつた。彼は病院に行きだ。すぐに手術を受けた。手術自体は順調に終わった。しかしその後で聞いた話は驚くべきものだった。

「運がよかったですね」

「運がですか」

「はい、危ないところでしたよ」

手術が終わって入院している病室で医者の話を聞く。医者はここでこう言ったのである。

「本当に」

「あの瘤に何かあったんですか？」

「あれは虫だったんですよ」

医者はこう話してきた。

「瘤の中にね、虫が一杯いたんですよ。寄生虫が」

「寄生虫ですか」

「調べたらアフリカの方にいる寄生虫で。それで」

「それが俺の中にいてですか」

「そういうことです。身体の内を動き回っていたんですよ」

「はい」

「そうした寄生虫もいますから」

医者の話は驚くべきものだった。少なくとも聞いていて気分のいい話ではなかった。

## 第四章

「それで身体中ミミズ腫れみたいにするのもいるんです」

「身体中をですか」

「それで額に瘤でしたね」

「ええ」

今度はその話になった。

「下手したらそれが目か脳にいつて」

「脳に」

「死ぬかも知れませんでしたよ、本当に運がよかった」

「そうだったんですか」

これまで多くの戦いを経ていて精神的な強さでも知られていた。

だがその彼が今の話を聞いてだ。明らかに恐怖を感じていた。

「脳にですか」

「それで心当たりはありますか？」

「テレビの収録で南アフリカに行きましたけれど」

その時のことを話した。アフリカと聞いてだ。そこしか心当たりはなかった。

「それですかね。そこで刺身を食べましたけれど」

「ああ、間違いなくそれですね」

医者もそれだというのだった。

「確実に」

「しかし。何で俺だけ」

彼はベッドの中に半身を起こしていた。そのうえで首を捻って述べる。

「他のスタッフにはそんな話は全然ないんですけれど」

「坂本さん食べる量が多いですね」

医者が指摘するのはこのことだった。

「そうですね」

「はい、そうですね」

「多分それですね」

こう彼に話す。

「それで。たまたま虫にあたったんですよ」

「そうだったんですか」

「そうした意味では運が悪かったですね」

医者はまた運の話をした。

「しかし助かりましたから」

「運がよかった」

「そうですね」

「そうですね。しかし」

「しかし？」

「怖いものですね」

その怖いもの知らずの彼の言葉だ。

「いや、そんなことがあるなんて」

「はい、ですからですね」

「食べ物には気をつけると」

「気をつけていてもこうしたことはありますから」

医者の忠告はかなり怖いものだった。

「その証拠に他の人は寄生されていませんね」

「はい」

「しかし貴方はなりました」

こう言うのであった。

「それが何よりの証拠です」

「食べる量が多かったからですか」

「しかしそれはプロレスラーなら仕方のないこと」

医者はこのことも指摘した。

「それを考えればです」

「仕方ありませんか」

「運です」

また運と言ったのであった。

「こうなってしまうたのは運が悪かったのです」

「運がですか」

「しかし。運がよかった」

運が悪かったと言ったのだ。すぐにそれを否定もするのだった。

「こうして助かったのですから」

「そういうものですか。運が悪くて」

「運がよかった」

「こう話すのである。」

「世の中誰でも運が悪くて運がよいものです」

「そういうものですか」

「おそらく。それが世の中なのでしょう」

これが医者坂本に話した言葉だった。何はともあれ彼は寄生虫に悩まされそれから助かった。このことは紛れもない事実であった。

蠢くもの 完

2010・6・2

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6023q/>

---

蠢くもの

2011年2月2日22時52分発行